

## コメント

日本史学専修 鶴見太郎

戦後の論壇で地域とともに「文化」が論じられた座談会のうち、今西錦司と石田英一郎による「人間の未来を語る」『展望』一九六六年八月号）は、両者の対峙する史眼の特色がよく現れた点で、逸することができない。この中で人類普遍の「世界文化的」なものを想定して、これに合致しない文化は捨てればよい、とする今西に対し、石田はどれだけ「世界文化」を掲げようと、個人の気質のようにこれだけは譲れないものがある、というのが文化なのではないかと、駁している。

こうした石田の視点は、「比較抵抗学」としての文化人類学として結実する。すなわち一元的な教義や強大な力を持った文明の影響に晒された際、人間は地域に根ざして反発・抵抗を繰り返してきたという前提に立ち、その様式を細かく辿ることで、そこに一定の法則性を見出そうとするのである。具体的にはかつて柳田国男が指摘した桃太郎伝説を援用することで、石田はこの課題に自ら応えた。日本に散在する伝説において水界から童子が出現する時、絶えずその母親と思しき像がその後景にたたずんでいることを手掛かりに、石田はその視野をユーラシア規模で拡大し、その過程で民間信仰に埋もれた地母神像を抽出する（『桃太郎の母』）。そして南イタリヤに根強く残ったマリア信仰において端的に示される通り、キリスト

教のような一神教的教義の許でも、地母神信仰は強かに生き残ったと位置付けられる。

では問題を日本に限定した場合、石田の想定した「比較抵抗学」にかなう事例に行き当たるとのだろうか。

平家落人伝説が伝承されている地域は、実際の平家公達の数よりも遙かに多いといわれる。この統計から指摘されるのは、日本の「地域」とは僻地であるとはいえず、絶えず自分たちの由来を中央（ここでは畿内）に求め、その文化的な連関を意識し続ける受動的な地域像である。日本の「地域」は、「内」を見つめず、その眼は絶えず中央に向けられていた、との批判（高取正男「日本史研究と民俗学」『岩波講座 日本歴史』二五）もここから引き出される。対馬南部にもまた、壇ノ浦合戦で入水した安徳は齋藤為持なるものに助けられて九州にのがれ、長じて島津氏から妻を迎え、やがてその子供が対馬地頭代になったことから対馬にわたり、久根田舎に居住してそこで死去したという伝承に基づく安徳天皇御陵墓参考地がある。

その一方で、特定の思想を媒介にして異なる地域同士が連なり合う可能性は常に秘められている。

例えば、稲作社会における「水利統御」の中から生まれる人間形象に着目してみる。田中正造の人間像はしばしば、前近代の水利社会から生まれたと評されることが多い。村落社会における的確な水の分配という直接の生活経験に根ざした原理に基づく規範は、初期

社会主義者たちと田中が決定的に異なっていた理由と位置づけられる。仔細に検討すれば、田中型の指導者は日本以外の稲作地域にも、例えばバリの稲作社会などでもしばしば散見されるものであり、地域を比較する際、有効な照合の尺度となる（玉城哲『水の思想』）。これは気候・地域的な隔たりこそあれ、対馬における水利統御にも繋がりが得るのではないか。

考古学専修 高橋 龍三郎

秦漢帝国の册封体制との関わりにおいて、長江流域、特に四川盆地周辺部は大きな歴史のダイナミズムに取り込まれることになった。支配と従属、在地文化・社会の盛衰も、そのような政治的支配機構の中で地域現象として現れる。ここでは、基本的に同じ文脈の中で展開した日本の弥生文化の地域的发展について、縄文社会の地域性と比較して論じたい。

縄文社会は特に資源が豊富で多くの人口を擁した東日本において顕著な発達を見た。関東地方の縄文後・晩期の文化、社会を分析すると、土器型式に代表される地域圏を単位として、母系制の単系出自集団をベースに親族集団が形成され、その頂点に頭目を戴くほどに社会が複雑化した。階層化過程にある部族社会（transegalitarian society）と見なすが、メラネシアのビッグマン社会に見るごとく、リーダーは際立った権力をもたない社会である。民衆より頭一

平成一六年度早稲田大学史学会大会報告

つだけ飛び抜けたリーダーが、支持者を集めては党派を形成し、競争的な祭宴を開催して多くの物流を促し、同盟関係や婚姻関係を操作し、調停工作をすることにより地域社会の顔として君臨する。

関東地方で社会発展の痕跡を明確に捉えることが出来るのは、弥生中期後半の宮ノ台式以後、全国的に稲作農業に移行した後のことである。その間の縄文晩期終末期から弥生前期にかけては一時的に社会・文化が縮小したものの、宮ノ台式期を迎えて関東地方は農業生産に支えられた拠点的な大規模集落を中核として、村落社会が展開した。この時期の大規模集落には、大形住居に居住し、死後一辺二〇mを越える大形の方形周溝墓に埋葬されたリーダー（首長）が存在した点が注目される。関東地方ではこれら弥生社会の発展のベールに、縄文時代後・晩期以来の複雑化した部族社会があった事に注目する必要があるが、しかし副葬品などをみると、弥生時代を通じて首長を頂点に強大な権力関係が生じたように見えず、社会は縄文社会から踏襲した親族組織と地縁を基盤とする社会であった。

一方、北九州は縄文晩期終末に朝鮮半島を経由して稲作農業を導入すると、一転して日本列島の中でも最も社会が進展した地域になる。稲作という生産経済が狩猟採集経済とは比べようもなく高い生産基盤を与えたからだとする説明が最も多い。しかし、関東地方で見たように、農耕社会を迎えたからといって縄文社会から飛躍的に社会が発展したわけではない事を考えると、経済基盤以外に、西日本地方の急激な社会発展を促進する背景があったと考えざるをえない

い。特に北九州地域では、弥生中期後半から後期を迎えると、立岩遺跡や三雲小路遺跡、須玖岡本D地点遺跡などのように、各平野ごとに地域のリーダーと目される人のカメ棺墓が造られ、中に大陸伝来の銅鏡や銅銚等の宝器が副葬される。これは北九州の一部の首長が漢王朝に朝貢したのに対して、漢の皇帝が下賜品として与えたものである。本来ならば漢帝国の郡県制の埒外におかれ、東夷の朝貢国として位置づけられたものが、皇帝から破格の厚遇を得て特別に冊封されたことを示すといわれる。これらの副葬品は、首長など生前に特別な地位をしめた人物が威信材として保有した宝器である。魏志倭人伝は、朝貢した奴国王卑弥呼に対して金印、鏡などを下賜したと伝えるが、これらは弥生時代の首長に下賜されると、一転して威信材として機能し、他の首長や衆人を区別し圧倒する機能を秘めたレガリアに転じるのである。中国の正史に「国」として位置づけられたこれらの小地方は、本場中国の律令国家とは比べるべくもないが、かなりの程度に複雑化した社会体制を構築したことは疑いなく、それらを原生国家と見る考えもある。首長墓と目される人の墓で、溝などで区画されるものは一般民衆から隔絶された「王墓」であるともみならず意見もある。国家とはいいがたいが、これらは初期的な首長国 (chiefdom) の段階まで達していたであろう。これらの首長国に向けた一連の動きが加速化されるのは弥生時代中期後半から後期になってからである。これは北九州に限らず西日本を巻き込んで展開しており、首長国間の相克として戦争など争乱の考古記

録に表れているのであろう。

漢帝国の冊封体制のもとで中核を遠く離れて位置する北九州が、東夷の朝貢国として遇された頃、近畿以東の東日本は、それにも属さない辺境地であった。当時の北九州の社会的、政治的發展は漢帝国との交渉抜きには語れないであろう。やがて古墳時代を迎えると社会・文化・政治の中枢は畿内に移行し、「大王」を中核とした政治的・社会的システムが構築されたが、やはり新、後漢との交渉を通じて、東アジアでの位置づけを意識したのであろう。しかし、東日本を中心とした地域には、後漢との直接的な交渉を示す如何なる証拠も発見されていない。依然として、朝貢国のさらに辺境部に展開する社会であった。このような世界帝国システムとの関わりの中で、東日本を含めた列島の社会の変革は促されたのであろう。国家形成期には東南アジアの各地で類似した過程が見られたに違いない。